

新入生歓迎講演会

戦場カメラマンが語る

日本人人質事件と イラク戦争の12年

わたいたけはる

お話し：綿井健陽さん



<プロフィール>

綿井健陽(わたい・たけはる)

1971年大阪府生まれ。映像ジャーナリスト・映画監督。

98年からフリージャーナリスト集団「アジアプレス」に参加。これまでに、スリランカ 民族紛争、スーダン 飢餓、東ティモール独立紛争、米国同時多発テロ事件後のアフガニスタン、イスラエルのレバノン攻撃などを取材。イラク戦争では、03年から空爆下のバグダッドや陸上自衛隊が派遣されたサマワから映像報告・テレビ中継リポートを行い、それらの報道活動で「ボーン・上田記念国際記者賞」特別賞、「ギャラクシー賞(報道活動部門)優秀賞」などを受賞。

05年に公開したドキュメンタリー映画『Little Birds イラク戦火の家族たち』は、国内外で上映され、2005年ロカルノ国際映画祭「人権部門最優秀賞」、毎日映画コンクール「ドキュメンタリー部門賞」、「JC」(日本ジャーナリスト会議)賞、大賞などを受賞。最新作のドキュメンタリー映画『イラク チグリスに浮かぶ平和』は、14年から各地で上映中。

とき：4月14日(火)

16:30 開場

17:00 開演

ところ：東北大学川内北キャンパス
講義棟C304

入場料：無料

東北大の新入生以外の方も大歓迎！

主催 / 東北大学学生自治会

連絡先：仙台市青葉区川内41東北大学川内北キャンパス構内サークル仮棟G-13

電話 090-4313-3867 (委員長・澤田) メール tohoku_usc@hotmail.com



かつての戦争から70年が過ぎようとしている今日、私たちにあって「戦争」が再び非常に身近な問題になりつつあります。安倍政権による秘密保護法制定、集団的自衛権行使容認の閣議決定、沖縄米軍辺野古新基地建設といった形で、日本が「戦争のできる国」への転換を具体的に遂げようとする中、年初に藤健二さんらの人質殺害事件が起きました。私たちの生活と、中東やウクライナで今この瞬間にも行われている「戦争」は繋がっています。そのような中で、果たして私たちは「戦争」の現実について、どれだけ知っているのでしょうか？「国際情勢の図式や構図でイラクを見るのではなく、彼らの日々の生活や気持ち、姿や表情をより映像で伝えたいと、ずっと思っていました。」と語る綿井健陽さんから戦争の実相についてのお話を聞いて、未来を担う私たち若い世代として一緒に考えましょう。

2月5日、琉球新報

邦人人質事件

綿井 健陽



わたい・たけはる 71年生まれ、大阪府出身。イラク戦争取材でボーン・ト由記念館副館長特別賞、公開中の映画「イラク チェクリスに浮かぶ平和」で、仏国際テレビ映像祭(FIPA)の特別賞受賞。著書に「リトルバース 戦火のバグダッドから」。

フリージャーナリストのを、ここ数日間思い浮かべ、後藤健二さんが、シリアかっていた。疲れて、やせ細つら環境を越えて、トルコ側 たもの、精いっぱい笑に歩いて戻ってくる光景 顔で応対する後藤さんの表

情を、心待ちにしていた。ア北部に何度も通って果敢 自分の目で見たものを録つてみたかった」と、映像取材に取材し、テレビのニュース番組などでリポートして、材を始めた動機を書いている(月刊「放送批評」1995年1月号掲載)。



職業かも知れない。そのこととは私もわかっていない。しかし、その動機や背景は理解されなくても、映像や写真に映っている、危険なところを躊躇さざるを得ない人たちのことは、知ってほしいと思っている。04年にイラクでは、自衛隊撤退を要求するクルーパに番田証生さんが首を切られて殺害された。湯川菜菜さんに続いて、後藤健二さんも同じ殺害方法だった。日本人だけでなく、誰であつても、これ以上同じような死者は出さじやない。イラク戦争を支持し、自衛隊を派遣、その後米国の軍事行動に歩調を合わせてきた日本。戦後70年の年に、この国に突き付けられたのは、過激派「イスラム国」からの刃物だけではなく、国際社会や戦乱の国に對して、日本が今後取るべき道は何なのか、その問いかけが突き付けられている。

初心貫いた後藤さん

日本に突き付けられた問い

後藤さんに初めて会ったのは、2001年の9・11同時多発テロ後のパキスタンとアフガニスタン取材だった。私が持っていた衛星電話で、「こちらは大丈夫だから、心配しないで」と、日本の家族に伝えていたことを覚えている。

後藤さんは、近年はシリアの紹介特集だ。そこで後藤さんは、「動く輪で、

その後20年間、彼はこの初心を貫き通した人生活たのではないか。日本人の報道関係者が取材中に殺害されたとき、日本のメディアでは一時的に大きく扱われる。だが、実際にはそこで多くの地元の人たちが、一時的にはなく、恒常的に殺

害されている。空爆・銃撃・爆弾・弾圧・処刑・拘束・拷問、ありとあらゆる暴力が、シリアで、イラクで、まん延している。そこでは当然、地元メディア関係者も多数犠牲になっている。

「私たちがだけでなく、イラク市民の生活が死と隣り合わせだから」 同胞たちの死があつても、それが彼らが取材や撮影をやめることはない。「なぜそんな危険なところに行くのか」という疑問を抱かれる人は多いだろう。「フリージャーナリスト」という肩書も、日本ではなかなか理解されにくい

監督

後藤健二さんの解放を願って首相官邸前に集まった人たち。しかし、願いはかなわなかった＝1月30日、首相官邸前

